川本聡胤： PC セット理論（4）ー概念的基盤をめぐってー

いわゆる「無調音楽」を分析するために発展してきた PC セット理論を紹介するシリーズの第4回目として、本発表では前回に引き続き、PC セット分析の初歩的概念、すなわちノーマルフォームとその移置や転回、それにセットクラスやプライム・フォームについて考察する。前回はこれらの概念の紹介にとどめたが、今回はそれらの意義について、バルトークの弦楽四重奏曲第4番冒頭楽章の分析を例に、考察を深める。

まず、ノーマルフォームを「基本形」と訳すならば、「移置形」がトランスポジション、「転回形」がインヴァージョンとなる。これらは実は、調性和声における和音の理論と、似た考え方と言えるのではないだろうか。もちろんさまざまな違いがあるとの異論があることは承知の上で、PC セット理論全体の中でのこれらの概念の位置付けを考えるならば、一定の条件下での類似関係を見出さざるを得ない。

また、セットクラスやプライムフォオームとは、それぞれ古典和声理論でいうところの和音の種類（タイプ）や名称に対応するものと見なすことができるのではないか。例えば調性和声理論では、C-E-G も、A-C#-E も、同じ種類の和音に属するが、PC セット理論においても 0-4-7 も 8-1-4 も、ともに移調により関連づけられるため、同じ「クラス」つまり同種の「セット」に属する。またこの種の和音の名称は「長三和音」であり、セットクラスとしては 037 となる。

いかなる理論も、それがなんのためのものなのか、何を解明するためのものなのか、といったことがわからなければ、机上の空論にしか見えなくなってしまうだろう。しかし無調音楽の解明のために PC セット理論がこれだけ世界的な支持を得ているのは、その目的とともに共有されているからであり、それも古典的な和声理論との深淵なレベルでの繋がりが理解されているからに他ならないのである。

本発表では、PC セット理論は音楽の何を解明してくれるものなのかーーーといったことに思考を巡らせることで、次回以降の発展的な考察の基盤を形成したい。